

生長の家の教えと実践 (2)

谷口雅春の生い立ちと青年期の体験

創始者谷口雅春は1893年に神戸市で生まれた。幼い頃、兄弟の中でただ一人養子に出されるも、中学時代を特待生として過ごした。その頃、養父母の物質的欲望に反抗し、精神的安寧を求めようになったという。彼は兄弟とは「別の運命を受け、その寂しさのうちに却って神を想ふやうになり、その寂しさと憧れとを文章で訴へるようになった」(島蘭1988: 72への引用)。大学進学にあたって、養父母は経済的な豊かさを求めて医者か軍人になることを勧めたが、谷口は苦しみながらも人生を理解することが美しいと文学の道を選んで、大正元年、早稲田大学英文科に進んだ。

西欧の文学者の思想に中学時代以来の反抗心と気高いもののへの憧れを重ね合わせ、実生活では劇的で深みのある「より美しい人生」を求めた。それは、犯罪歴を持つ貧しい少女との同棲生活に看取される。彼にとってそれは愛の実践であると同時に、経済的繁栄と安逸を至上の価値とする養父母への反逆だった。養父母から仕送りを断られた谷口は、結果として退学を余儀なくされる。後に、彼はそのような過去を軽薄な文学青年の愚行で、自己中心的な快楽だったと述懐している(島蘭1988: 75)。

その後の谷口は、挫折を抱えながら田中守平の太霊道や木原鬼仏の耳根円通法などの「心霊療法」を研究するようになり、25歳の頃、それらを通じて大本教を知る。学生時代から疑問を抱いてきた貧富の差や弱肉強食が当然とされる社会のあり方に対して、彼は大本の教えがそのような社会悪を根底から取り除き、人間的な社会秩序をもたらしてくれると理解した。そして、同教団の鎮魂婦神法が霊の実在を科学的に実証するという考え方にも魅了された。そこで彼は「宗教と哲学と科学との間に眩い黄金の橋」が架けられたと感じたという(島蘭1988: 78への引用)。

鎮魂婦神で谷口は狐の霊の言葉を語った。そして、養父に殺意を抱いたり、愛人に執着していたのは彼自身ではなく、谷口に憑依していた狐の霊であると理解することで一時の安寧を得る。そのような体験を通じて谷口は、高貴なものを追求する「本来の自己」と本来の自己から遠く隔たった現実の「偽りの自己」とを区別するようになり、「本来の自己」に目覚めることで理想に献身する「義なる自己」を目指すことができるようになった。対立する二つの自己を捉え、それらの和解を導く論理は、生長の家の救済論として結実している(島蘭1988参照)。

大本に入信してから約3年半の間、谷口は綾部と亀岡の大本教本部で禁欲的な修道生活を行っている。その間、彼は教団の月刊誌『神霊界』の編集や「キリスト再臨論」の講義を行った。彼の講義は信者の間で有名になり聴講者が増えたが、彼自身は「最後の審判をパスできるほどに浄まるのはいつのことか見当が」つかないことに苦しむようになる。罪意識が消えないまま、本来あるべき「義なる自己」を振る舞うことは出来ないと考えようになったからである。

「本来の自己」と「偽りの自己」の調和

谷口のこうした苦悩は、「本来の自己」と「偽りの自己」の不調和を超克することで解決されるべきものだった。28歳の頃、彼は京都で西田天香が活動している一燈園とその思想にふ

れることになる。西田は北海道の炭坑で資本家と労働者の間に立ち、労働者の監督をすることで収入を得ていたが、社会的に不平等に疑問を抱いて郷里の近江に戻って托鉢を行い、弱者を虐げることのない生活を求めた(谷口1998: 218)。当時は社会科学のアプローチによる社会変革が論じられた時代だが、西田の思想は闘争による社会変革ではなく、闘争を否定しながら弱者に同情し、憐憫愛を示すことで闘争欲を克服するという立場に立っていた。そのためには自らの罪を省み、人より高い地位に立とうとする思惑を取り払う。そうした懺悔の生活を伝えるための共同生活の場が一燈園だった。

あるべき社会像と現実とのギャップを内省的な方法によって解決するという西田の思想は、「本来の自己」と「偽りの自己」とのギャップに喘ぐ若き谷口に解決の糸口を与えるべきものだったに違いない。しかし、彼にとって一燈園は安住の地とならなかった。「一燈園の生活といえども奪い合いの生活で、本当に調和した生命を生きていないのだと思い、思い切って一燈園の生活にもなりきれなかった」からである(谷口1998: 219)。また、世間の利益追求の生活を批判して清貧に甘んじることは彼の本義ではなく、むしろ豊かさの中にあっても全てのものを生かすような境地を求めた(島蘭1994: 260～265)。

谷口にとって、いわゆる懺悔は自己抑圧的であり、徹底して自己を開化させることが自由の境地を得ることにつながると理解した。31歳になった彼は、フェンウィック・ホルムスの『The Law of Mind in Action』を通じてニューソートの考え方を知る。大本教とともに、このニューソートの思想が生長の家の教えと実践の形成に大きくかかわっている。

ニューソートは19世紀後半のアメリカで広まった。多大な影響を与えた人物にフィニアス・P・クインビー(1802～1865)がいる。クインビーは、「動物磁気」によって病の治療が可能だと説いたメスメリズムの実践家だったが、後に心の変化で病気が治るという認識を獲得した。彼の思想は多くの人々に影響を与え、心の変化による「真実」の認識が癒しと幸福をもたらすという思想体系としてのニューソートが生まれた(島蘭1994: 267)。

ニューソートでは、恐怖心や自己攻撃を誤ったものとして取り去り、自己に内在する神性を信じて明るくゆったりした心になることを目指す。生長の家の祈りや儀礼ではこのような思想が如実に反映されている。とはいえ、谷口はニューソートをそのまま継承したわけではない。ニューソートでは「目に見える」現象世界は神の創造物であり、病気や不幸も神のなし給う業だと説く。しかし、谷口はそれは生長の家の思想ではないと言う(谷口1998: 177)。生長の家では、霊界を含め現象世界のできごとは「実相」として「円満完全」であるからこそ、人びとの苦悩は「幻想」に過ぎないと理解される。

【参考文献】

- 島蘭進「生長の家と心理療法的救いの思想」『日本宗教の正統と異端』桜井徳太郎編、弘文堂、1988年、67～90頁。
島蘭進「神と仏を越えて一生長を家の救済思想の生成」『岩波講座 日本文学と仏教』第8巻、岩波書店、1994年、257～284頁。
谷口雅春『人類無罪宣言』楠本加美野編、日本教文社、1998年。